

## イギリス民謡について

尾崎徹

ともすれば私達はイギリスを一つの民族国家と捉えがちだが、そもそもイギリスは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つのカントリーからなる立憲君主国。最近では、元々イングランドと仲が悪かったスコットランドの独立という流れが今まさに起きている。イギリスもまた大きな転換期を迎えようとしている。スコットランド独立がイギリス全体としては油田資源や軍事的拠点を失うことになるため、首相始め多くの要人が説得にあたる一方、ポンド通貨を使わせなくするなど制裁措置をちらつかせ、アメとムチで必死の抵抗を試みている。スコットランド独立となれば、ゴルフ全英オープン開催場所はその発祥地スコットランドが多くを占めており、場合によっては数年後には全英オープンと呼ばれずスコットランドオープンに名を変えるのではとの懸念も囁かれている。

さて、今回取り上げるイギリス民謡はイングランド、スコットランド、北アイルランドの3つのカントリーに渡っており、「アニー・ローリー」はスコットランド発祥の民謡であり、「ダニー・ボーイ」や「庭の千草」はアイルランドの民謡である。



地図：SES International Ltd.より転載

イギリスは一見して独自の伝統的な音楽の歴史を持っているかに思えるが、イタリアで発生したルネサンスから伝播した影響を多分に受けているのではないか。何故なら「グリーンズリーブス」に見られるイタリアンリズムの特徴ともいえる軽快な3拍子やロマネスクリズムにも現れていることからそれはほぼ間違いない。また、イギリス古典音楽のR(アール)を巻き舌にするのもイタリア音楽の影響と言われている。

従って、イギリス音楽の独自性と言うべきものが捉えにくい。あえて言えば、ファ音を使わずにドレミの上昇音型と、それに呼応したドシラソミの下降音型が随所に現れてくるのが特徴か。下手をすればどの音楽も個性無くただ穏やかな調べとしてしか聞こえてこない恐れがある。

例えば「庭の千草」はドレミーと登りドシラソソーミと降るし「グリーンズリーブス」は(ラ)ドレミで始まり中間部でドードシラソーミド(レミ)となる。また「アニー・ローリー」は、後半部分に(ソー)ドードレーレミーとなり続いてミレド(シ)ラードラソーミーと、ドシラソミの音型を縫っていくように降りてくる。「ダニー・ボーイ」は(シ)ドレミーで始まり、中間部はド(シ)シラソ(ラ)ソミドと下降する。そして「埴生の宿」も後半(ド(シ)ソー)ド(シ)レーミーと進んだあと(ソー)ド(シ)ラソーソーミと下る。どれをとっても同じメロディに言葉を変えたとしか思えないような節回しである。従って連続して演奏すればどれを聴いても同じような音楽に聞こえてしまうのである。

私は、今年2月時点でアーリーサマーのOBステージが決まらなかったことに少々業を煮やし、この5曲のイギリス民謡を提案した。マエストロは最終決定の段階で、私にどう展開すれば良いかを求めてきた。が、それをたずねてくるのは当然のことである。何故ならこの5曲どれもが下手をすれば同じ節を奏でる特徴無い音楽に聞こえるから。5曲を続けて演奏すれば殆ど印象に残らない状況に陥ることが予測出来るからである。しかしこの5曲は同じ雰囲気と同じ節であったとしても、それぞれが作られ育まれた背景やその歌詞に込められた物語は五曲五様。そのことが聴衆に伝わらなければ全く無味乾燥なステージになってしまう。そこで聴衆を飽きさせない工夫が必要となる訳だが、それは追ってこれからの練習で説明していきたい。節回し以外の特徴的な個性を再発見して演奏に結びつけることにこれから時間を費やすのは決して無駄な作業ではなく、それはきっと私達にとって楽しい試みとなるだろう。

### 1. 埴生の宿 (イングランド)

埴生とは、土で塗ったみすぼらしい家の意味だが、そんな住まいこそ楽しい我が家だと、自身の家に住むことの幸せを歌う。元々1823年初演のオペラ「ミラノの乙女」の中に流れる一曲で、シシリー島の古歌を補作したものと言われている。

その後日本では里見義(さとみただし)の名訳により、唱歌として広く歌われるようになり「日本の歌百選」にもなって日本人の心に日本の歌としてしっかり根付いていった。

やがて太平洋戦争を迎えた頃、ビルマで大勢のイギリス兵に囲まれた日本兵が、一瞬の休息にこの歌を歌い始める、勿論日本語で。それを聴いたイギリス兵はこれに合わせて英語で歌い始めたときにはもう戦を再開しようと思うものは誰も居なかった。(『ビルマの豎琴』から)

### 2. アニー・ローリー (スコットランド)

1682年12月、スコットランドのマックスウェルトン卿の末娘として生まれたアニー・ローリーはその類い希な美貌で多くの男性の羨望の的だった。この曲の作詞者、ウィリアム・ダグラスもその1人。しかし結婚を申し込むも氏族間対立と父の猛反対にあってその恋は叶わず、ダグラスは忘れられないローリーの思いを一編の詩に託した。(作曲はスコットランドの女流音楽家ジョン・スコット)

時は移りそれから200年後のクリミア戦争の頃にこの曲を含む歌集が出版され、戦地の多くの兵士たちが故郷に思いを馳せて歌ったと言われている。

そしてこの曲が日本に入ったときは小学校唱歌として、1番の歌詞は紫式部、2番は清少納言を歌った「才女」と言う題目で紹介された。日本においては習うべき‘女の鏡’として広めようとした意図が伺えるが、ダグラスの思いは、ただただ忘れ得ぬ人へ『愛しいローリーのためなら私の命を捧げる。死ぬことすら厭(いと)わない』と込められている。

### 3. ダニー・ボーイ (アイルランド)

出兵する息子を思う親の気持ちとしてアイルランド民謡「ロンドンデリーの歌」に歌詞が付けられた。元々色々な歌詞で歌われていたメロディに、イングランドの弁護士フレデリック・ウェザリーが1913年に作り直したものであり、イギリスでは葬儀に流す曲の定番となっている。ダイアナ妃の葬儀でも別の歌詞ではあったが歌われた。

この曲は元々3拍子だったのではと言う説があり、当時の歌手がとてもルバートを利かせていたので広く伝わるうちに4拍子になったのではと言われている。また、歌詞に出る息子を思う主人公は母親ではなく実は父親ではないかと言う説もあり、この曲は謎が多い。

なお最近アイルランドのポップス作曲家が作った「you raise me up」と言う曲がこの「ダニー・ボーイ」の旋律に酷似していて話題になった事もある。

#### 4. 庭の千草 (アイルランド)

アイルランドを代表する国民的詩人トマス・ムーアの詩があまりに美しく、彼の洞察力の深さが表れている。庭に一輪だけ咲き残ったバラを見て彼は、その心情を推し量り、人間社会と我と我が身になぞらえた。

長寿は誰もが持つ願望だが、長生きすればするほど友や家族、子や孫に先立たれることさえある。心情を、一輪のバラを見ただけで想像を巡らす彼の洞察力には驚きを隠せない。

なお、日本では、バラではなく「白菊」の題名で紹介され、広く歌われるようになった。

#### 5. グリーンスリーブス (イングランド)

16世紀に、イングランドとスコットランド国境付近で生まれた曲。ヘンリー8世が恋人の為に作曲したという説もあるが、真意は定かではない。また、野外の草が袖に染み付いたとされるレディ・グリーンスリーブスという娼婦がモデルだったという説もある。

何れにしても男が女に対して愛と憎しみを歌う筋書きの歌詞が、イタリアで流行ったロマネスク調の節に乗って悲しく流れていく。この曲にはリュートやトラベルソ(横笛)が良く合い、物悲しく素朴な演奏が16世紀の時代に我々を誘(いざな)うような感覚を味わせてくれる。

なお、8thコンサートでは上記のような内容を私のMCで紹介をしながら、客席の皆さんにも親しみの持てるステージにしたいと思っている。

2014/09/17

スコットランド国民投票の日を目前にして